

レンズ を

連載「三月」

写真・文 高円宮妃久子殿下

通して



キジ オス 80cm メス 60cm キジ科

4月から6月の繁殖期、
オスはケーン、ケーンとよく通る
大きな声で鳴き、
直後には両方の翼を激しく振って
ドドドドド…と聞こえる
音を出し、縄張りを主張する。
朝夕にはケー、ケーと
かすれたような声も出す。

繁殖期のオスは特に色鮮やかで美しい。顔の赤は露出した皮膚。ハート形の膨らみが大きいほうがメスに好まれるらしい。オスの尾は、メスに比べるとかなり長く、灰褐色で黒の横斑がある。求愛の時には斜めに尾を広げ、メスに見せてアピールする。



日本の国鳥——「雉子」

写真文 高円宮妃久子

3月3日は桃の節句、ということですが、今回は「桃太郎」にも登場するキジについて書かせていただくことにしました。目立つ風貌で多くの絵に描かれ、「ケーン、ケーン」と通る声からも多くの歌や句に詠まれてきた鳥です。結婚当初、高円山たかまがはらの情景を詠んだ万葉歌「雉鳴く高円の辺に桜花散りて流らふ見む人もがも」を紹介され、その時、初めて「雉、雉子」を古くは「きぎし、きぎす」と言っていたことを知りました。

キジは昭和22（1947）年に日本鳥学会により国鳥に指定されています。国鳥として選ばれた理由としては、日本の固有種であることや『古事記』や『日本書紀』に記載があり、桃太郎などの民話で古くから人々に親しまれていたこと、オスは羽が美しく、飛ぶ姿が力強く男性的であり、メスは「焼け野のきぎす」といわれるように、巢のまわりが燃えてもわが身をかえりみずに卵やヒナを守り、母性愛と勇気を象徴していることがあげられます。また、キジは大きく、狩猟対象として最適であり、肉が美味。国鳥が狩猟対象であることは世界的に珍しいのですが、歴史的に見て、日本人の生活には欠かせない鳥であったともいえます。宮中でもお正月にはキジの肉を入れた雉酒をいただきます。

桃太郎の家来となって鬼退治に参加するキジは、勇気があることから偵察役を担いますが、勇気があるといわれているのはメスの方。卵を抱いたメスは、何が起ころうとも、誰が接近しようとも、最後まで



キジの足に「ケリツメ」と呼ばれる
鋭い牙のようなものがあり、縄張り争いで使う。
繁殖期は一夫一妻か一夫多妻、
冬は雌雄で別々の群れを作る。



子連れのメス。よく見ると
草むらの中にヒナが数羽いる。
低地から山地の草原、
河原や農耕地に生息し、地上に巣を作る。
主に植物の種、果実や昆虫などを食す。

で巣を離れない習性をもっています。しかし桃太郎の家来はオスのキジ。オス同士の縄張り争いはなかなか迫力がありますが、通常オスは警戒心が強く、勇気があるというよりはむしろ逃げるスピードがとても速い、というイメージです。またキジは強い足を持っており、普段の移動は歩行がほとんどですが、敵から逃げる場合などには大きく重い鳥であるのにもかかわらず、垂直に飛び上がります。

ところで、キジのオスは極めて色鮮やかですが、メスはとても地味です。それはなぜでしょう。このような鳥に共通しているのは、オスが子育てを手伝わず、メスのみが子育てをする点です。子育てするメスは敵に目立たないことが好都合であるため、地味な姿に進化したのでしょう。そして解放されたオスはできるだけ多くのメスにアピールするために、この派手な姿に進化したと考えられます。

動物では、キジのようにメスがオスを選ぶのが一般的です。しかし人間は逆に、女性がおしゃれをして派手な色目で着飾り、男性は地味です。つまり女性が男性にアピールし、男性から選ばれようとしているとも考えられるのです。そしておしゃれをしながらも、女性のみが子育てに励んできたという歴史もあります。ところが最近では女性が男性を選ぶことも多くなりましたし、子育てに参加する「育メン」も増えてまいりました。

人間の場合、相手を選ぶのは男性なのか、それとも女性なのか。派手に着飾りながら、子育てをしてきたのはなぜなのか。これら人間の行動が今後、いかに変化していくのかなど、動物行動学的に、そして社会的にどのよう説明されていくのでしょうか。必ずしもキジと同列に議論するべきものではありませんが、何となく気になる興味深い問題です。